

認識と価値形成

——企業と人間の進化の問題の基礎——

(四)

笠原俊彦

3-7 狭義の価値および価値形成機構の相対性

人間の対象観念および対象観念形成機構と同様に、その狭義の価値および価値形成機構も、これを全体としてみるとき、つぎの二つの意味で、相対的である、といわれなければならない。

第一に、さまざまな有機体種について、その狭義の価値および価値形成機構を全体として比較するとき、われわれは、人間のそれが最も優れている、ということが出来るわけではないし、ましてや、それが唯一完全である、ということが出来るわけではない。この意味で、われわれは、人間の狭義の価値および価値形成機構が種的相対性をもつ、といわなければならない。

第二に、われわれは、人間の狭義の価値および価値形成機構が、これを全体としてみるとき、最も優れたものに向かって進化している、ということが出来るわけではないし、ましてや、それが完全なものに向かって進化している、ということが出来るわけでもない。この意味で、われわれは、それが定向的相対性をもつ、といわなければならない。

以下では、わたくしは、人間の対象観念および対象観念形成機構の場合と同様に、その狭義の価値および価値形成機構についても、上記二つの相対性をとりあげ、これについて考察することにしよう。

(1) 種的相対性

いかなるものごとをいかに好むかまたは嫌うか、より正確に言えば、いかなる対象観念にいかなる正または負の狭義の価値を付与するか、のあり方、すなわち価値形成のあり方は、有機体種によって異なりうる。このことについては、わたくしは、狭義の価値および価値形成機構の種的特殊性として、すでに述べた。

このように種的特殊性を有する狭義の価値および価値形成機構について、われわれは、いかなる有機体種のそれが全体として最も優れているか、をいうことができず、したがって、人間のそれが、他の有機体種のそれに比べて、最も優れている、ということとはできない。ましてや、われわれは、人間のそれが唯一完全である、ということとはできない。このことが、わたくしが、以下で、まず、とりあげようとすることである。

わたくしがここで念頭に置いている価値形成機構は、いうまでもなく、有機体の内部的機構としてのそれである。内部的機構としての価値形成機構は、何らかの有機体種についてこれをみるとき、対象観念形成機構の場合と同様に、さまざまな要素から成り立っている、と考えられうる。

この場合、何らかの有機体種の価値形成機構を構成する要素をどのように理解するかは、その対象観念形成機構を構成する要素をどのように理解するかとともに、一つの問題である。だが、ここでは、わたくしは、この要素について詳細に検討することを控えることとしたい。わたくしは、ただ、対象観念形成機構の場合と同様に、価値形成機構の要素として、さまざまな狭義の価値を形成する要素的機構を想定することとしよう。そして、わたくしは、これを、要素的価値形成機構とよぶことにする。

われわれ人間の価値形成機構が複数の要素的価値形成機構から成り立つことは、われわれが、何らかの特定のものごとについて、しばしば、好悪さまざまに入り混じった感情を同時に抱く、という日常的経験から、容易に推測されうるであろう。われわれが何らかの特定のものごとについて好悪入り混じった感

情を同時に抱くとき、われわれは、自らの内部で、このものごと、すなわち対象観念、に対して、複数の異なる狭義の価値を同時に形成しているのであるが、このことは、われわれが、これら複数の狭義の価値を、われわれのうちにある何らかの単一の価値形成機構によってではなく、むしろ、その複数の異なる要素ないし要素的価値形成機構によって形成している、という想定を、われわれに可能とするのである。

価値形成機構の要素的価値形成機構へのこのような分化が、すべての有機体種について見出されうるか否かは、わたくしには、明らかではない。だが、われわれは、例えば、われわれに身近な動物である犬や猫との生活から、人間だけでなく、他の有機体種の少なくともいくつかについては、要素的価値形成機構への価値形成機構のある程度の分化が存在する、という想定をなすことができるであろう。わたくしは、このような想定にもとづいて、以下の論述を進めることとする。

われわれは、さまざまな有機体種が、さまざまな要素的価値形成機構を有し、

1) この場合、このような種類をそもそも区別することができるのか、ましてや、それをいかに区別することができるのか、または、いかに区別すべきか、については、現在のところ、わたくしは、必ずしも明確な考えを有しているわけではない。

たしかに、わたくしは、このような種類とも思われるものを、これまで、いくつか例示してきた。だが、その場合でさえ、わたくしは、わたくしが例示したものとその関係とについて、ある程度明確な体系的枠組を有していたわけではないのであり、まして、この枠組が何らかの種類という概念といかに関連するか、については、皆目、見当がついていなかったことを告白しなければならないのである。

種類の区別ないし分類という考え方とその問題点については、つぎを参照されたい。

拙稿「理想型」による認識と経営経済学の学派分類(一)『松山大学論集』第2巻第5号、1990年12月。

拙稿「理想型と事実認識—理想型」による認識と経営経済学の学派分類(二)一『松山大学論集』第6巻第6号、1995年2月。

拙稿「理想型による認識と分類による認識—理想型」による認識と経営経済学の学派分類(三)一『松山大学論集』第7巻第1号、1995年4月。

この場合、わたくしは、分類という考え方が学問研究上いかなる場合にも用いられるべきではない、と考えているわけではない。それは、何らかの事象については、少なくとも有効であるように見える。わたくしが、さまざまな有機体種というとき、ここには、すでに、分類の考え方が用いられている。

これら要素的価値形成機構によって、さまざまな狭義の価値を形成する、と考えることにしよう。このとき、われわれは、このような要素的価値形成機構および狭義の価値について、いくつかの種類¹⁾を区別することができるであろう。そして、さまざまな有機体種は、それぞれ、おそらく、このような価値形成機構および狭義の価値の種類のいくつかのみを有しうるものであり、この数は、有機体種によって異なりうる。

有機体の一つとしての人間は、じつに多様な対象観念について、さまざまな狭義の価値を形成する。わたくしがメタ狭義の価値について述べたことからすでに明らかのように、人間は、いわば次元を異にするさまざまな狭義の価値をさえ形成する²⁾

このように多様な狭義の価値を形成する人間は、多様な要素的価値形成機構を有するであろう。だが、それにもかかわらず、人間は、他の有機体種が有する要素的価値形成機構の何らかを欠いている可能性がある。

われわれは、いま、要素的価値形成機構について、その特定種類を念頭に置くことができる、と仮定しよう。さらに、われわれは、この特定種類の要素的価値形成機構が、複数の有機体種に見出されうる、と仮定することにしよう。このとき、われわれは、この種の要素的価値形成機構が、これを有する有機体種によって、その機能の様式と程度とを異にしうると考えることができるであろう。

ここにいう機能の様式を、われわれは、何らかの種類の要素的価値形成機構の機能の型といい換えることもできるであろう。この機能の様式ないし型は、例えば、仮に、味覚という対象観念に対応する限りでの美味しさを、一つの狭義の価値種と考え、この狭義の価値種を形成する機構を、要素的価値形成機構の一種と考えるとき、そして、また、いくつかの有機体種が、何らかの対象について味覚という対象観念を形成し、この対象観念について美味しさという狭

2) このことは、要素的価値形成機構が、いわば平面的にのみならず立体的に構成されて全体としての価値形成機構を形成することを含意するであろう。

義の価値種を形成しこれに付与する、と考えるとき、美味しさというこの狭義の価値種の形成機能においてさまざまな有機体種が示す、それぞれの有機体種に一般的な特徴を意味する³⁾

いくつかの有機体種が、例えば、味覚という対象観念に対応して美味しさという狭義の価値種を形成する要素的価値形成機構を有する場合にも、この要素的価値形成機構の機能の様式は、そしてまた、その程度は、有機体種によって異なりうるであろう。このことを、われわれは、例えば、いくつかの動物種における食物の好みとその程度の相違から推測することができる。人間が、このように要素的価値形成機構の機能の様式と程度とを異にする諸種の有機体のうちの一つであることは、いうまでもない。

さらに、われわれは、さまざまな有機体種が、それぞれに有する要素的価値形成機能を、孤立的にではなく、連携的に機能させて狭義の価値を形成する、と考えることができるのであるが、この連携的機能のあり方も、有機体種によって異なりうるであろう。

ここで、われわれは、認識機構の場合にならって、要素的価値形成機構のそれぞれの機能を、要素的価値形成機能と呼ぶことにしよう。ここにいう要素的価値形成機能は、もちろん、それぞれの要素的価値形成機構が有する、狭義の価値の形成機能である。この機能は、要素的価値形成機構の二つの意味における連携的機能に関わるものとして現れる。

この連携的機能の第一は、さまざまな要素的価値形成機構の機能ないし要素的価値形成機能のいわば構造化のうちに現れる。

何らかの有機体の価値形成機構は、要素的価値形成機構の単なる合計ないし寄せ集めではない。その要素的価値形成機構は、これらに関連づけて一つの全体とする構成の仕組みによって結合されている。この仕組みは、いわば分業と

3) このような機能の様式ないし型は、一つの有機体種の一つの要素的価値形成機構の機能について、一つだけ存在するとは限らない。それには、複数のものが存在しうる。さらに、この場合、一つの様式は、複数のものの組合わせとしても存在しうる。

協業との関係において、さまざまな要素的価値形成機構の機能を組合わせ構成化する仕組みである。有機体の価値形成機構は、この意味における構成の仕組みによって、はじめて、それを構成する要素的価値形成機構の機能を、少なくともある程度、調整し、一つの全体としての価値形成機構として機能することができる。

分業と協業との関係における要素的価値形成機構の機能のこのような調整、これが、要素的価値形成機能が関わる連携的機能の第一である。この連携的機能は、要素的価値形成機能そのものの性質ではなく、すべての要素的価値形成機能を連携させる機構の機能であることが注意されなければならない。

要素的価値形成機能が関わる連携的機能の第二は、いくつかの要素的価値形成機能の複合として現れる。

要素的価値形成機構は、何らかの対象観念について、一方では、分業と協業との関連におけるそれぞれに固有の役割に応じて、単独で、狭義の価値を形成する。だが、それは、他方で、また、そのいくつかは、いわば複合的に機能して、新しい狭義の価値を形成することがありうるであろう。ここにいくつかの要素的価値形成機構の複合的機能によって形成される狭義の価値は、一つの要素的価値形成機構が個別的に機能して形成する狭義の価値とはもちろん、複数の要素的価値形成機構がそれぞれ単独でまたは個別的に機能して形成する複数の狭義の価値の結合とも異なる内容を有するのであり、この意味で、新しい狭義の価値とよばれうるのである。

いくつかの要素的価値形成機構のこのような複合的機能は、いわば別種の要素的価値形成機能である。それは、要素的価値形成機構のそれぞれの機能ないし個別的機能ではないが、価値形成機構の機能の全体を構成する要素ではある。そこで、この場合、われわれは、要素的価値形成機能という言葉を広大的に用いて、このうちに、いくつかの要素的価値形成機構の複合的機能を含めるとともに、一方で、要素的価値形成機構の個別的機能を、個別的要素的価値形成機能または単純に個別的価値形成機能とよび、他方で、要素的価値形成機構の復

合的機能を複合的要素的価値形成機能または単純に複合的価値形成機能とよんで、両者を区別することにしよう。

このようによぶとき、要素的価値形成機構の連携的機能は、一つには、いくつかの要素的価値形成機構の複合的機能として、さらに、もう一つには、要素的価値形成機構の機能の分業と協業との関係における調整機能として、現れることになる。このうちの前者は、拡大された意味での要素的価値形成機能であることが、とくに注意されなければならない。

さらに、この場合、われわれは、後者にいう要素的価値形成機構の連携的機能が、そのうちに、要素的価値形成機構の個別的機能のみならず、複合的機能をも調整する機能であることにも、注意しておかなければならない。要素的価値形成機構の複合的機能も、また、要素的価値形成機構の個別的機能とともに、分業と協業との関係における要素的価値形成機構の機能の調整の枠組のうちに存在するのである。

人間を含むさまざまな有機体種は、それぞれが有する要素的価値形成機構の以上二つの意味における連携的機能においても、異なりうる。この場合、さまざまな有機体種間における要素的価値形成機構のこの連携的機能の相違は、さまざまな有機体種が、それぞれに異なる種類の要素的価値形成機構の組合せを有する場合にはもちろんのこと、同種類の要素的価値形成機構の組合せを有する場合にも、見出されうるのである⁴⁾

さて、以上のように、さまざまな有機体種が、その有する要素的価値形成機構の種類と数とを異にしえ、また、それぞれの種類の要素的価値形成機構について、その機能の様式と程度とを異にしうることを知るとき、そして、さらに、

4) 要素的価値形成機構の以上二つの意味における連携的機能についての論述は、要素的認識機構についても妥当するであろう。

この場合、われわれは、認識機能についてわれわれがすでに用いた言葉にならって、要素的価値形成機構の連携的機能という言葉だけでなく、また、要素的価値形成機能の総合という言葉を用いることもできる。このような用語法をとるとき、われわれは、ここにいう要素的価値形成機能の総合が、けっして、その合計ではないことに注意しなければならない。

さまざまな有機体種が、その要素的価値形成機構の機能の連携のあり方を異に
しうるとき、われわれは、さまざまな有機体種が、それぞれに、異
なる狭義の価値を形成しうることを認めざるをえないであろう。

このことは、いくつかの有機体種が、仮に、同一の対象について、同一の対
象観念を形成したとしても、いえることである。しかしながら、さまざまな有
機体種は、同一の対象について、異なる対象観念を形成し、これらそれぞれの
対象観念について、異なる狭義の価値を形成しうる。このことは、さまざまな
有機体種が、相互に著しく相違する狭義の価値を、同一の対象について形成す
る可能性を示すものといえるであろう。そして、人間が形成する狭義の価値は、
このように有機体種によって相違しうるそれぞれの有機体種に独特の狭義の価
値のなかの、たんなる一つであるにすぎないのである。

このように考えてくるとき、人間の価値形成機構が、他の有機体種のそれに
比べて、全体として、最も優れているとはいえないこと、ましてや、唯一完全
であるとはいえないことが、明らかになるであろう。人間は、すべての種類の
要素的価値形成機構を、しかもその最良の様式と型において、有しているわけ
ではなく、さらに、また、それらを最良の連携において機能させているわけ
もないからである。すなわち、

- (1) 人間は、おそらく、すべての種類の要素的価値形成機構ではなく、たんに、そのうちのいくつかの種類の要素的価値形成機構をもつにすぎず、これらの要素的価値形成機構種は、人間が有せず他の有機体種が有する要素的価値形成機構種に比べて、優れている、ということとはできない。
- (2) 人間が有する要素的価値形成機構種の機能の様式と程度は、他の有機体種が有する同種の要素的価値形成機構の機能の様式と程度とに比べて、優れている、ということができない。

いま、味覚的对象観念について美味しさという狭義の価値を形成する要素的価値形成機構種を想定し、この要素的価値形成機構種について、この

ことを例示しよう。

このとき、例えば、ユーカリの葉を美味とする価値形成機能と、肉または魚を美味とする価値形成機能との差を、美味という狭義の価値を形成する要素的価値形成機構の機能の様式の相違として理解するとすれば、われわれは、この様式のいずれが優れているか、をいうことができない。したがって、人間が肉または魚を美味と感じ、コアラがユーカリの葉を美味と感じるとき、われわれは、美味という狭義の価値を形成する要素的価値形成機構の機能の様式について、人間のそれが優れている、ということができない⁵⁾

何らかの種類の要素的価値形成機構の機能の程度についても、われわれは、他の有機体種のそれに比べて、人間のそれが、つねに優れている、ということとはできないのであるが、上記のように、要素的価値形成機構の機能の様式について異なる有機体種間の優劣をいうことができないとき、その機能の程度について、異なる有機体種間の優劣を問うことは、そもそも、意味をなさないであろう。

- (3) 人間が有する要素的価値形成機構の機能の連携のあり方は、他の有機体種が有する要素的価値形成機構のそれに比べて、優れている、ということができない。

人間を含む諸種の有機体の価値形成機構は、その認識機構と同様に、われわれにとって未知の分野である。それは、認識機構と比べるとき、むしろ、より一層、未知の分野である、といわれるべきものであるかも知れない。それゆえに、われわれは、もともと、人間の価値形成機構が、他の有機体種のそれに対して、全体として優れている、と断言しうるだけの根拠を有していないのであ

5) この例示においては、人間とコアラとが肉や魚やユーカリについて異なる対象観念を形成しうることが無視されている。この対象観念形成の相違を考慮するとき、ここにいう機能の様式についての優劣の判断は、より容易になるどころか、より困難になるだけであろう。

る。

だが、このことを別として、各有機体種の価値形成機構の優劣を問題とするとき、われわれは、認識機構の場合と同様に、その優劣判定の基準ないし比較の基準について考察しておかなければならない。ここにいう比較の基準は、もちろん、各々の有機体種の価値形成機構の優劣を全体として判定するための基準である。

わたくしは、このような基準を、対象観念形成機構の優劣を全体として判定する基準と同様、少なくとも現在のところ、見出すことができない。

価値形成機構は、認識機構とともに、あらゆる有機体種について、そもそも、その生存のために、あるいは、より良い生存のために存在する、と考えられうるであろう。このように考えるとき、われわれは、諸々の有機体種の価値形成機構の優劣を全体として判定する基準として、何よりも、それぞれの有機体種の生存、さらには、より良い生存への、価値形成機構の役立ちいかん、を想定しなければならない。

だが、われわれは、生存への役立ち、さらには、より良い生存への役立ちのいかんを、さまざまな有機体種の価値形成機構の優劣を全体として判定する基準とすることができない。その主たる理由は、対象観念形成機構の優劣を全体として判定する基準の場合と同様、生存への役立ち、さらにはより良い生存への役立ちのいかんが、さまざまな有機体種の価値形成機構の優劣を全体として判定する基準としては、あまりにも漠然としているからである。

単純に、生存への役立ちのいかんを基準とする場合にも、われわれは、やはり、Popperが適応のいかんについて直面したと同様の困難を回避することができない。生存への役立ちのいかんという基準は、ここでも、価値形成機構の機能のいかんに関わりなく、とにかく、生存している有機体種の価値形成機構は全体として良い、という結論以外の何ものをも導かないからである。このような結論は、ここでも、また、人間の価値形成機構よりも、バクテリアのそれの方が、全体として優れている、という主張を生み出しうるであろう。

このような困難は、生存への役立ちのいかに代えて、より良い生存への役立ちのいかに基準とすることによっても、解消されるわけではない。このように、基準を複雑にすることは、問題を複雑にするだけである。

さまざまな有機体種の対象観念的形成機構の優劣を全体として判定する基準の場合と同様に、われわれは、ここでも、いかなるものを基準として設定するにせよ、さまざまな有機体種の価値形成機構の優劣を全体として判定する基準が、各有機体種のもつさまざまな要素的価値形成機構それぞれの機能のみならず、その連携の仕方をも含めて、その優劣を総合的に判定しうるものでなければならぬ、と考えざるをえない。そして、このような要件を満たす基準を形成するためには、われわれは、やはり、上記の諸項目のすべてについて、その重要度ないし比重を問題とせざるをえない。

このような重要度ないし比重の決定は、対象観念形成機構の優劣の判定基準の形成の場合と同様の困難に直面する。それは、それ自体、一種の価値判断あるいは価値形成であり、おそらく、恣意的にのみなされうるものである。

以上において、わたくしは、異なる有機体種について、その価値形成機構の全体としての優劣を問題としてきた。だが、価値形成機構の優劣について、わたくしがここでとりあげるべき問題は、以上に尽くされるわけではない。

わたくしは、さきに、認識機構の優劣について、さまざまな有機体種の認識機構の優劣を全体として判定する基準とは別に、その優劣を、著しく限定された項目について個別的に判定する基準を問題とした。そして、わたくしは、全体的基準についてと異なり、この個別的基準については、各有機体種の認識機構の優劣をいうことが可能であろう、と考えた。

それでは、全体的基準から区別されるこの個別的基準は、価値形成機構についても考えられうるであろうか。そして、それは、さまざまな有機体種の価値形成機構の優劣を判定することを可能とするであろうか。わたくしがつぎに考えておかなければならない問題は、これである。この問題を考察するために、

わたくしは、まず、認識機構の優劣に関する個別的基準としてわたくしがさきに例示したものを、ここで、より詳細に跡づけておくこととしたい。

わたくしが、認識機構の優劣に関する個別的基準として、さきに例示したものは、つぎの三つであった。

- (1) 何らかの静止している物体を、どの程度の距離から視覚的に把握することができるか。
- (2) 何らかの動いている物体に、視覚的、聴覚的、またはその他のいかなる方法を用いてであれ、どの程度の距離から気づくことができるか。
- (3) 何らかの有機体種は、他の有機体種に比べて、どれ程の多様性を認識機構またはその機能について有するか。

これらの例示のうち、第一のものは、何らかの有機体種の認識機構を構成する要素的認識機構の特定のもので、何らかの条件のもとで、何らかの対象を把握しうる程度の測定についての例示である。

この場合、認識機構についても、何らかの対象の認識が、一つの要素的認識機構単独での機能、すなわち個別的要素的認識機能ないし個別的認識機能、によってなされうる場合だけでなく、いくつかの要素的認識機構の複合的機能、すなわち複合的要素的認識機能ないし複合的認識機能、によってなされうる場合がありうることを考えるならば、われわれは、ここで、この両者について、その対象認識の程度の測定を考えなければならないであろう。わたくしは、ここにとりあげられている例示を、何らかの有機体種の要素的認識機構の機能度 (grade of functionality, Grad der Funktionalität) の測定についての例示とよぶことにする。

ここに要素的認識機構の機能度とは、特定の一つまたはいくつかの要素的認識機構種が、個別的に、または複合的に、何らかの具体的条件において、いかなる様式であるかを問わず、とにかく、何らかの対象を把握しうる程度を意味

する、といわれうる。この意味の機能度は、要素的認識機構種の個別的または複合的機能のさまざまな様式における強さないし程度の総合として現れうるのであり、したがって、それは、さらに、これら様式とその程度とについて、分析的に考察されうるであろう。

つぎに、例示の第二のものは、何らかの有機体種が、その有する内部的機構としての認識機構のいかなるものを用いてであれ、また、それらをいかに連携させてであれ、とにかく、何らかの条件のもとで、何らかの対象を把握しうる程度の測定についての例示である。わたくしは、これを、何らかの有機体種の内部的機構としての認識機構の機能度の測定についての例示とよぶことができるであろう。

認識機構のこの機能度については、認識機構のいかなる要素が、どのようにして、その対象を認識するのかは、一切問題にならないことが、とくに注意されなければならない。ここでは、認識機構のいわば全体としての能力ないし全体としての機能の優劣が問題とされているのである。それゆえに、われわれは、これを認識機構の全体的機能度とよび、これに対して、第一の例示における要素的認識機構の機能度を認識機構の部分的機能度とよんで、両者を区別することも可能であろう。

この場合、ここに問題となる全体としての認識機構の機能の優劣は、特定の具体的条件において特定の対象についてみた限りでのその優劣である点で、さきに述べた全体としての認識機構の機能の優劣から区別されることが注意されなければならない。

最後に、例示の第三のものは、何らかの有機体種の認識機構が、どれ程多様な要素から成り立っているか、または、どれ程多様な機能を有するかの程度を測定する基準についての例示である。わたくしは、ここで、認識機構の多様性を、その要素そのものの多様性ではなく、むしろ、その機能の多様性として理解し、第三の例示を、何らかの有機体種の認識機構の機能的多様性 (variety of functions, Vielfalt der Funktionen) の測定についての例示とよぶことができ

るであろう。

この機能的多様性は、各々の要素的価値形成機構の個別的認識機能だけでなく、その複合的機能をも含む多様性であることが注意されなければならない。さらに、われわれは、ここにいう機能的多様性として、個別的認識機能および複合的認識機能のそれぞれについての様式ないし型の多様性をも、問題とすることができらるであろう。

われわれは、さまざまな有機体種の認識機構を、例えば、以上のような三つの個別的基準について測定して比較し、この基準の関する限りで、それぞれの優劣を判断する可能性を有する。

それでは、これと同様のことは、価値形成機構についてもいわれらるであろうか。すでに述べたように、狭義の価値は、何らかの対象観念について形成されるだけでなく、対象観念なくしても形成されるのであるが、ここでは、わたくしは、論述の便宜上、とくに前者の場合を念頭に置いて、考察を進めることとする。

われわれは、まず、要素的認識機構の機能度に相当するものとして、要素的価値形成機構の機能度を考えることができるであろう。ここに要素的価値形成機構の機能度を、わたくしは、何らかの要素的価値形成機構が、何らかの条件の下で、何らかの対象観念について、個別的であれ、複合的であれ、何らかの狭義の価値を形成しうる程度として理解することとする。この意味における機能度も、さまざまな機能の様式における程度の総合であり、それゆえに、それは、これら様式とその程度とについて、分析的に考察されらる。

われわれは、つぎに、認識機構の機能度に相当するものとして、価値形成機構の機能度を想定することができるであろう。ここにいう価値形成機構の機能度を、わたくしは、何らかの有機体種が、価値形成機構のいかなるものを用い、また、それをいかに連携させるかにかかわらず、とにかく、何らかの条件のもとで、何らかの対象観念について、何らかの狭義の価値を形成しうる程度として、理解することができる。認識機構の機能度の場合と同様、ここでも、価値

形成機構のいかなる要素がいかにして狭義の価値を形成するかは、一切問題にならないことが、注意されなければならない。

われわれは、この機能度を、価値形成機構の全体的機能度とよび、これに対して、前述の要素的価値形成機構の機能度を、価値形成機構の部分的機能度とよんで、両者を区別することができる。この場合、ここにいう全体的機能度が、特定の条件において特定の対象観念についてみた限りでの価値形成機構全体の機能度であることは、いうまでもない。

最後に、われわれは、認識機構の機能的多様性に相当するものとして、価値形成機構の機能的多様性を想定することができる。ここで、わたくしは、認識機構の機能的多様性の場合と同様、価値形成機構がどれ程の多様性を有するかを、とくにその機能がどれ程の多様性を有するか程度として理解しようとするのである。

価値形成機構の機能的多様性についても、われわれは、これが、要素的価値形成機構それぞれ単独での機能ないし個別的価値形成機能だけでなく、いくつかの要素的価値形成機構の複合的機能ないし複合的価値形成機能をも含む多様性である、と考えることができる。われわれは、さらに、要素的価値形成機能および複合的価値形成機能のそれぞれについてみられうる様式の多様性をも、ここに問題とすることができるであろう⁶⁾

さて、われわれは、例えば、以上に示した、要素的価値形成機構の機能度ないし価値形成機構の部分的機能度、これから区別される価値形成機構の機能度ないし価値形成機構の全体的機能度、価値形成機構の機能的多様性のそれぞれ

6) 価値形成機構について、要素的価値形成機構の機能度、価値形成機構の機能度、要素的価値形成機構の機能的多様性の三つを見出すとき、われわれは、何らかの有機体種の価値形成機構の機能度を、この有機体種の価値形成機構を構成するさまざまな種類の要素的価値形成機構の機能の総合として理解することもできるであろう。われわれは、何らかの有機体種の価値形成機構の機能度が、この有機体種の価値形成機構の機能的多様性の如何と要素的価値形成機構の機能度の総合の如何とによって決定される、ということもできる。

同様のことは、また、認識機構についてもいわれうるであろう。

について、これらを有機体種ごとに測定し、さまざまな有機体種の中の優劣を判定する可能性を有するであろう。もちろん、これらの測定のためには、さまざまな困難が解決されなければならない。

われわれは、例えば、要素的価値形成機構の機能度を測定するために、そして、価値形成機構の機能的多様性を測定するためにも、さまざまな要素的価値形成機構の機能ないし要素的価値形成機能の種類を確定しなければならない。この確定がなければ、われわれは、そもそも、測定すべき機能を知ることができないし、また、価値形成機構がいかにか多様な要素的機能の種類を有するかを知ることができないからである。そして、この要素的価値形成機能の種類確定には、多くの困難が伴うのである⁷⁾。

さらに、また、われわれは、価値形成機構の全体的および部分的機能度を測定するための条件を考察し、これを明示しなければならない。これらの機能度は、そこに設定される条件が異なれば、異なりうるからである。この条件の明示にも多くの困難が伴うことは、いうまでもない。

以上に示した困難は、価値形成機構についてのみ、存在するわけではない。われわれは、それらを、認識機構についても見出さざるをえないであろう。したがって、以上の関する限り、われわれは、認識機構と価値形成機構との間に格別の相違を見出すことはできないようにもみえる。

だが、価値形成機構については、他方で、認識機構には存在しない困難が存在する。この困難は、認識機構の性質とは異なる価値形成機構の性質に由来する困難である。

このような困難の一つとして、わたくしが指摘しておきたいことは、とりわ

7) 狭義の価値は、対象観念との関連において発展してきた、と考えられうるものであり、また、それは、通常、何らかの対象観念について形成されるのであるから、その種類は、一つには、対象観念の種類によって規定される、ということが出来るであろう。

もっとも、この場合、いくつかの異なる対象観念について同様の狭義の価値が形成されうることを考えるとき、われわれは、対象観念の種類が直ちにこれに対応する狭義の価値の種類を生み出す、ということとはできない。そして、また、われわれは、他方で、一つの対象観念に対して、さまざまな狭義の価値が形成されうることをも忘れてはならないであろう。

け価値形成機構の全体的機能度に、そして価値形成機構の部分的機能度に関わることがらである。

わたくしは、以上において、価値形成機構の機能度を、何らかの対象観念について何らかの狭義の価値が形成されうる程度として理解してきた。そして、わたくしは、また、要素的価値形成機構の機能度を、やはり、何らかの対象観念について何らかの要素的狭義の価値が形成されうる程度として理解してきた。これらの理解においては、もはやいうまでもなく、狭義の価値は、対象観念が形成されていることを前提として、これについて形成される、と考えられている。このことが、狭義の価値の広義における形成ないし広義における価値形成のいわば二つの場合、すなわち、すでに形成されている対象観念に対する狭義の価値の形成ないし価値判断と、それ自体で独自になされる狭義の価値の形成ないし狭義における価値形成とのうち、前者を念頭に置いていることは、いうまでもないであろう⁸⁾。

さて、何らかの対象観念が形成されていることを前提とし、これについて狭義の価値が形成される場合を念頭に置くとき、われわれは、価値形成機構の全体的機能度および部分的機能度の判定について、認識機構のそれとは異なる一つの問題に直面せざるをえないことになる。それは、狭義の価値の形成が、何らかの対象についてではなく、この対象について形成された対象観念についてなされることから、価値形成機構の全体的機能度および部分的機能度を、対象との直接的関連において判定することができないこと、これである。

このことを、わたくしは、価値形成機構の全体的機能度を例にとり、これについて考えてみることにしよう。ただし、価値形成機構の全体的機能度についての以下の考察は、その部分的機能度についても妥当することが注意されなければならない。

8) これと同様のことは、また、認識機構についても問題となりうるであろう。認識にも、何らかの対象の存在を前提とする認識と何らかの対象の存在を前提としない認識がありうるからである。

何らかの対象観念が形成され、これについて、何であれ、狭義の価値が形成される場合を考えると、狭義の価値の形成に先立つ対象観念の形成のいかんは、もちろん、対象観念形成機構ないし認識機構の機能度のいかに依存する。そして、狭義の価値形成から区別される価値判断を念頭に置く限り、価値形成機構は、何らかの対象について認識機構が対象観念を形成しなければ、狭義の価値を形成しない。この場合には、価値形成機構は、認識機構が、いかなるものであれ対象観念を形成する場合に、はじめて、何らかの狭義の価値を形成しうるのである。

そこで、価値形成機構の機能度は、これを何らかの対象との関連についてみると、認識機構の機能度に依存することが注意されなければならない。しかも、認識機構の機能度は、すでに述べたように、有機体種によって異なりうるものであり、したがって、さまざまな有機体種間の価値形成機構の機能度の相違は、その認識機構の機能度の相違によって、影響を受けるのである。

それだけではない。われわれが、ここでさらに注意しなければならないのは、同一の対象についての対象観念の内容が、すでに述べたように、有機体種によって異なりうることである。しかも、価値形成機構は、あらゆる内容をもつ対象観念について、つねに機能するわけではなく、また、機能するとしても、等しく機能するわけではない。価値形成機構は、ある種の内容をもつ対象観念については、狭義の価値を形成せず、他の種の内容をもつ対象観念については、狭義の価値を形成するかもしれない。価値形成機構は、ある種の内容をもつ対象観念については、容易に狭義の価値を形成し、他の種の内容をもつ対象観念については、容易には狭義の価値を形成しないかもしれない。そして、対象観念の内容に対する価値形成機構のこのような機能度の相違も、また、有機体種によって異なりうるのである。

このようにして、さまざまな有機体種の価値形成機構の機能度は、それぞれの有機体種の認識機構が形成する対象観念の内容によっても、影響を受けることが注意されなければならない。

そこで、さまざまな有機体種について価値形成機構の機能度をより正確に測定し比較しようとするとき、われわれは、異なる有機体種のうちで、対象観念形成機構の機能度ができる限り同程度のものについて、しかも、そこに形成される対象観念の内容ができる限り同様のものについて、それぞれの価値形成機構の機能度を測定し比較しなければならない。

このことは、自ずから、比較の対象となりうる有機体種の数、きわめて限られたものになることになるであろう。なぜなら、さまざまな有機体種のうちで、対象観念形成機構の機能度が同程度であり、しかも、そこに形成される対象観念の内容が同様であるものは、それが存在するとしても、著しく少ない、と考えられうるからである。

だが、それだけではない。そもそも、さまざまな有機体種についての価値形成機構の機能のこのような測定と比較は、予め、その対象観念形成機構の機能度が測定され比較されていること、そして、そこに形成される対象観念の内容が明らかにされ、比較されていることを前提とする。

以上のことは、対象観念形成機構の機能度の測定と比較に比べ、価値形成機構のそれを、明らかに、より困難なものとする。